
ドラゴンとかたおしたい。

しもじも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンとかたおしたい。

【Nコード】

N9386Z

【作者名】

しもじも

【あらすじ】

「従姉妹のプレイしていたポケモンを横から見ていた事、これが元の世界での何よりの経験だった」

と、後に勇者倉内沙里（14）は語った。

これはそんなゲーム初心者の彼女がゲームのような世界に行ってしまったお話である。

ドラゴンと会った

1

「ぶじじじ」

広い部屋だった。

足元には美しく輝く床。壁はあるが天井がなく、そのまま青い空が広がっている。

何本もの水晶の柱が天を突くように伸びていた。

そして、そこにひとりの少女が立っている。

黒髪を可愛らしく二つ結びにした、歳は十歳前半ほどの少女だ。

「うわー、ええー」

現実ではあり得ない、夢かゲームかのような光景に言葉を失い、倉内沙里は思わず目を瞬かせた。

「どうなってるのこれ。夢．．．じゃない。

．．．え、うそ、天国？ し、死んじゃっ．．．」

この世のものとは思えない光景に、沙里は混乱する。

そして、もしかしたら死んでしまったのではないかと半泣きのまま、先程まで自分が何処に居て、何をしていたか考えてみた。

．．．．．そう、自分は自室にいた。

中学校から帰宅して部屋に入り、ベットに横になって十分もしない内に眠りに落ちた。

両親は共働きで居なかったし、鍵はしっかりと掛けた。自分に何か出来る人間は居なかったはずだ。

誘拐なんて始めから考えていない。こんな超常の場所に連れて来ることが出来る人なんているはずがない。

ではやっぱり自分は死んでしまっていて、ここは天国なのだと考えた方が納得出来る。

理沙の両の瞳に、じわつと涙が溜まった。

学校の友人、先生、従姉妹、そして両親と会えなくなってしまいかもしれない。いや、きつと会えなくなるだろう、何故なら自分は死んだのだからと、悪い方へ悪い方へと考えが進んで行く。

《ぴん》

突然沙里の耳に電子音が聞こえた。

驚き、音がした方向、右の空に沙里は目を向ける。

そこには淡く輝く文字が浮かんでいた。

《L V . 8 2 : ブラッドドラゴン》

「.....ぶらっー?」

そして突如、空が割れ雷鳴が轟いた。

『くくくくく、よく来たな、我が塔を征し者よ。人の身でここまで来たのは貴様でさん「う、うあああああ!!」……………うええええええええん!」……………おい、如何した』

雲を裂き、雷鳴と共に天から現れたのは海外のファンタジー小説に出てくるようなドラゴンだった。

それも空を覆うほどの巨体で、捻じれた角が四本生え、赤黒い鱗を体中に生やしていたものだから、その威圧感と叫びたらなかった。

沙里はあまりの恐怖に号泣し、その場に震えながらへたり込み、頭を抱え、亀のように地面に伏せた。

そのあまりの怯え様に、竜は落胆したとばかりに鼻を鳴らした。

竜は強者を求めてこの塔を建てたのだ。

ここまで来たからには目の前で震える少女も強者たる実力が備わっているのだろうが、力に精神がついていかなければ真の強者とは足り得ない。

久々にこの塔の最上階に辿り着いた強者がいると飛んで来たからこそ、竜の落胆は大きかった。怒りさえ覚えたかもしれない。

その凶悪な双眸が沙里を責める様に見据える。

『ふん、名乗りもせぬ内に臆しおつて。

この竜神の塔を踏破したとはとても思えぬ小娘だが、この場に貴様が居ることがその何よりの証拠。

せめて一息で消し飛ばしてくれるわ!』

巨大な竜がそう言い放つと、竜の顎に黒い火炎の球体が出現した。

恐らく途轍もない熱量を秘めているであろうその竜の業火は、
どん膨張していく。

沙里は、自分が如何なるのか理解した。

「ーっひっ!」

『さらばだ! 幼き人の子よ!!』

放たれる竜の業火。

その圧倒的な火力に包まれ、沙里の上半身は消し飛んだ。

沙里は最後の言葉も無かった。

自身も状況を理解しないまま炎に焼かれ、死んだのだ。

棒立ちになっていた沙里の下半身が生々しい音をたてて倒れる。

それを竜は冷めた瞳で見ていた。

かつてこの塔を踏破し、自分に挑んで来た人間達も、初見では大なり小なり恐れ、震えたのだ。

しかし彼らはその恐れを強靱な精神で押し殺し、闘い、誇り高く死んで行った。

『呆気ない、守護の術も掛けていなかったか。何故あれ如きがこの塔の最上階に……』

ここは英雄達の墓場でもある。

そしてこの場に、この愚かな小娘の魂はふさわしくない。

竜が残った下半身を消し飛ばそうとしたーっそのときだった。

ぎゅる、ぎゅる、ぎゅる、と音を立てて、下半身の断面から肉がせ

りあがってきたのだ。

そしてその肉はやがて人の輪郭を形作っていく。

おぞましい、人間とは思えぬ現象だった。

正常の人が見れば、恐怖に顔を引きつらせながら化け物と叫ぶことだろう。

しかし、この竜は唯でさえ強面どころではない顔を凶悪に歪ませ、笑ったのだ。

驚くことに、歓喜の哄笑だった。

『くつ、くはははは！　そうか、貴様人間の癖に不死者か！

これはいいぞ！　お前こそ我が望んでいた存在だ！』

かつての人間の英雄は、人以外が持ち得ぬ異常な成長性、悪魔的な智謀、限界を超えて戦う精神力を持つてして、自分と対等に闘ってきた。

竜はその、種族の持つ純粋な強さに囚われない強さに惹かれ、好んで人間と闘う様になったのだ。

が、一度重傷を負えば死ぬしかない、成長しきる前に寿命が尽きる、老いるなど致命的な弱さもあった。

しかし、目の前でしきりに瞬きを繰り返している少女は、それがなという。死なぬというのだ。

『よい、よいぞ。まさかこの様な出会いがまだ残されていたとはな。しかし、やはりまだ情弱。身体が、何より精神が。故に、特別に我が血をくれてやる』

竜は完全に蘇った沙里の口に、己の血を垂らした。

途端に沙里は叫び転がり、悶え始め、そして動かなくなった。

沙里はまた死んだのだった。

『何の事はない、お前は死んでも蘇る。目が覚めた頃には新たな力を得ているであろう。』

その力を使いこなせる様になったとき、もう一度我に会いに来い』

沙里の身体は絶えず肉が裂かれ、骨が砕かれを繰り返している。意識が無くとも生きてさえいれば問題ないとばかりに。

沙里の身体は竜の血によって造りかえられていた。

狼を倒した

2

《ぴろん》

電子音が鳴った。

わたしはゆっくりと意識を覚醒させた。

朝・・・・・・・・・・。

母だろうか、腕を引っ張られている。

何時も一人で起きているから、起こしに来るなんて珍しい。

寝過ぎした？

しかし、両親は毎朝わたしが起きるころには家を出ている。では誰が？

けっこう強引に、力強く、生温かく。

生温かく？

「グルルルルルル・・・・・・・・！」

・・・犬？ いや、大きさから推測するに狼だろうか。

黒い狼が、わたしの腕に食らいついている。それにしても痛みがない。ペットは飼ったことがないのでわからないが、甘噛みというや

つだろう。

しかし首は凄いい勢いで右左に振ってる。この前TVで観たワニのようだ。獲物の肉を引きちぎるとき。

首を巡らせる。

自分の部屋ではない。森である。

何故自分はこんな所にいるのだろうか。謎だ。

「ガッルル！　グルウ．．．ガッ！！」

兎に角、じゃれてくる狼が好い加減うっとおしい。腕を振り、ぺいっと離してしまう。

狼は、3メートルほど飛んだ後、空中でぐるりと宙返り、体制をしっかりと整えてから地面に着地した。

「グルルルッ！」

唸っている。

威嚇しているのか。いや、ジリジリと後ろに下がっている。

警戒しているのか？　唯の女子中学生に？

「ん？　あれは．．．．．」

先程は半覚醒状態で気がつかなかったが、狼の頭上には光る文字が浮いていた。

《Lv.5:ワイルドドッグ》

「ワイルドドッグ？ あれ、この文字、そういえば何処かで見たよ
うな……ああ、あのドラゴンは夢じゃなかったのか」

おかしい場所に気がつければいて、恐ろしいドラゴンが現れた。こう
して生きてここに居るということは死ななかつたらしい。

しかしあんな生き物が現実に居る訳がない。

レベルや名前が光の文字になって表示される訳がない。

さしずめここはファンタジーなゲームの世界、ということだろうか。
つまり、ここはわたしの生まれ育った世界ではない。

わたしは今までの人生で手に入れた全てを一瞬にして無くしたのだ。

自分でも驚くほど簡単に、わたしはその事実を受け入れた。

ふふっ、と笑みが漏れる。

恥ずかしい。何であの時のわたしはあんな無様を晒していたのだろ
うか。

強者に敵わないのはわかる。しかし、ならば力を着けて出直して来
ればいいだけであって、つまりは逃避こそが正解。その場で膝を突
くなんて以ての外なのだ。

いや、それこそが逃げだ。勝利からの逃げだ。

ならば、どうやってかは知らないが、今無事で此処に居るわたしは
まだ負けてはいない。

あの竜に勝る力を身につけ、そしてあの角やら牙やらを全部引き抜
いて首輪にし、わたしのペットにしてやればいいのだ。

それは、それはとっても気持ちのいい出来事になるだろう。

この僅かな思考の時間を好機とみたか、狼……ワイルドドッグは
跳躍し、飛びかかってきた。

が、遅い。

わたしは横つ跳びの後転げ、その勢いのまま立ち上がり中腰で構える。

狼はその間にわたしのいた場所を通り過ぎ、着地、反転していた。

そういえば痛くなかったから放っておいたが、わたしはあの狼に左腕を噛まれていなかっただろうか。

狼をちゃんと見ながら、チラリと視界の端で腕を確認する。

狼の歯形だ。しっかり血も出ている。

縫うまではいかないが、それなりの怪我だ。気を向けたらじくじくと痛み始めた。

狼の黒い体が深く沈んだ。

「グルア！」

跳躍。先程の焼き回しだ。

目は完全にその動きを捉えている。

今度は余裕を持たず、腰を更に落として体を一つ分ずらしてみた。

が、これでは駄目。まだ当たる。

そう、その爪だ。

これを前に転がって避けて、頭が上に向けたところで伸ばした足の踵を……そこ。柔らかい腹にカウンター！。

足に薄い毛と、ぶにゅっとした脂肪の感触。……ん？ 裸

足である。服も変な・・・まあいい。

背中と両手でしっかりと地面を掴んで、膝を伸ばす。

「ギヤウ!？」

ベキゴキと骨を折る感触。

よし。5メートルは飛んだ。そして確信した。

「あのドラゴン、わたしの体に何をした」

唯の女子中学生であるわたしにこんなこと出来るはずがない。こんなに早く、ついさっきできた左腕の傷が治るはずもない。

身体能力、判断力、頑丈さ、考え方や話し方もおかしくなっている。そして以前のわたしに狼のモーニングコールを冷静に対処できる度量はない。

でも、どれも不都合なことではない。寧ろ好都合。

身体、精神、戦士として重要なこの二つが大幅に上昇した。何を嘆くことがあるうか。

ちなみに髪の色も赤黒く変色していたが、これはどうでもいい。些事だ。

見やれば、狼は既に虫の息だった。

近寄り、首を踏みつけ、一思いに踏み抜く。

「オーギャン」

ゴキリと音がして、狼は死んだ。

《びろびろりん》

《倉内沙里のLevelは上昇した。倉内沙里はLv・2になった》
《倉内沙里はスキル咆哮を覚えた》

電子音、そして目の前に光る文字が現れた。
レベル、スキル、どちらもゲームのよくあるシステムだ。

「本当にテレビゲームの世界のようだな。わたしもよくは知らないが……っつと、よく、知らないけどね……と。」

うん、やっぱり話し方まで変えるのはよくないよね。わたしが倉内沙里であることに変わりはないんだし。

性格はもうどうしようもないからね。しょうがないよね」

それよりレベルだ。

これは単純に強くなったと解釈していいだろう。ゲームはしないと
言っても、このくらいは知っている。

次にスキル。

これは単純に技能とか、技だろう。

わたしは咆哮というスキルを覚えたらいいのだから、どうやって使えばいいのだろうか。

「咆哮」

とりあえず口に出してみたが、何も起こらなかった。

スキルを使った

3

《びろん》

《Lv・4：チェリースライム》

殴殴殴

《びろん》

《Lv・3：ホーンラビット》

蹴蹴蹴

《びろん》

《Lv・4：チェリースライム》

踏踏踏

《びろんびろん》

《倉内沙里のLevelは上昇した。倉内沙里はLv・4になった》

《倉内沙里はスキル爪裂きを覚えた》

「スキルが使えない。なんでだろう」

森で目が覚めてから三時間。

わたしはスキルを使いたいと色々試しながら歩き続け、目についた

モンスターを倒して森を進んでいた。

そこで気が付いたことを二つ。

先ずは最初に戦った狼、ワイルドドッグは中々いならしいということ。

しかし狼は群れで狩りを行なうとTVでやっていたので、一匹見かけたら十匹いるかもしれない。

次にレベルの高いモンスターはこの森にはいないということ。

ここはゲーム初心者の森なのかもしれない。初めから強い敵が出て来れば、初心者の内は直ぐに死んでしまうから・・・と、そう考えれば納得出来るのだが、やはり現実ではそんな都合のいいことはあり得ない。

と言うことはつまり都合のいいこの森が存在することは、やはりゲームの世界なのだろう。

《びろん》

などと考え事をしていくと、モンスターが出現したときの電子音。いや、モンスターが此方に気が付いたときの、だろうか。

《Lv.5:グリーンバード》

「スキル使用、咆哮」

やはり何も起こらない。

「クエー！」

緑の怪鳥は翼をはためかせ飛翔した。

しかしわたしにとつてこれは好都合である。

スキルについては先程、あらかた試し終えていたので、では戦闘中ならばと考えていたのだ。

「スキルパワー、スキルポイント、スキルセット、スキルシステム、スキルパワー使用、スキルポイント使用、スキルセット使用、スキルシステム使用・・・いや」

気が付いた。

ゲームもパソコンのように、ボタンを押して専用のウィンドウを開き、持ち物の確認やセーブ、環境の設定をするのだ。
従姉妹のやっていたポケモンを思い出せ。

「・・・どうぐ、わざ、すばやさ・・・そうか！ ステータス！ ステータスウィンドウ使用！ ステータスウィンドウオープン！」

突如、焦れたのか突っ込んできたグリーンバードと、待ち望んだ光の窓がわたしの前にその姿を表した。

「ふっ！」

とりあえず横っ跳びに回避。

光の窓はわたしの後を追うように一瞬消えて、再度目の前に現れた。

《ステータス》

LV : 4 : 倉内沙里

竜人族

HP : 200 / 200

MP : 80 / 80

ATK : 50

DEF : 45

INT : 25

MGR : 35

AGI : 35

DEX : 10

LUK : 15

40pが未使用です

ポイントを割り振って下さい

スキル

咆哮 : 3p 未設定

爪裂き : 5p 未設定

フィニッシュスキル

ドラゴンクロー : 40p

未設定

スキルが未設定です
スキルを設定して下さい》

竜人族！？

いや、今は後回しだ。

「スキル咆哮、設定！」

．．．．．変化なし。

今度は未設定の文字に触れてみる。やはり何も起こらない。
非常に面倒な使用である。

「ステータス．．．じゃない。オープン．．．スキルウィンドウ
オープン！」

ステータスウィンドウに重なるようにして、もう一つの光の窓が現れた。
どうやらキーワードはウィンドウとオープンだったらしい。

《スキル

咆哮 設定できます

爪裂き 設定できます

フィニッシュスキル

ドラゴンクロー 設定できます》

真近で聞かされたグリーンバードは、そのあまりの音量に耳を打たれ前後不覚に陥り墜落。

わたしは何故か興奮状態に陥り地を蹴り跳躍。その勢いのままグリーンバードに飛び蹴りを喰らわせた。

地面が陥没するほどの勢いの蹴りである。その間にいたグリーンバードは水風船のようにビシャアッと潰れてしまった。

スキル咆哮。

その効果は敵の気絶または戦意喪失と、自身の戦意向上であった。

システムを学んだ

4

「メニューウィンドウオープン」

森の中で一人呟く。

普通ならば奇人変人と避けられる所だ。しかしこれだけは口に出さなければ反応しないのでしょうがない。

わたしの目の前で、呼びかけに応えるようにして光の窓が開かれた。

《メニュー

「アイテム」 「装備」 「スキル」 「ステータス」 「地図」

「設定」》

アイテムと念じ、選択する。

《アイテム

白いワンピースE

所持金：0Z》

まあ、これは何も持っていないのでしょうがない。

そこで、そこらへんに落ちていた石を拾い、入手と念じる。
すると光の文字が現れる。

《石（小）をアイテムボックスに入れますか？》

Yesと念じる。

すると、わたしの掌の上にあった石は一瞬で消えてしまう。
いや、消えたのではない。移ったのだ。アイテムボックスとやりに

もう何度も試したが、ここでメニューを開き「アイテム」を選べば、
白ワンピースの下に石（小）と表示されていることだろう。
そしてその石（小）に対し、破棄と念じれば石が消滅し、出現と念
じれば再度掌に現れるのだ。

物凄く便利なシステムだが、自分の触れている物体でないとしまえ
ないという制限も存在した。

まあ、それを差し引いても便利なのだか。

ちなみに体内の物質はアイテムボックス内に入れることが出来ない。

先程もよおし、試しにと念じてみたのだが駄目だった。

対象はしっかりと目で見る必要があるそうだ。

次に「ステータス」と念じる。

《ステータス

L v . 4 : 倉内沙里

竜人族

HP : 200 / 200
MP : 72 / 80

ATK : 50
DEF : 45
INT : 25
MGR : 35
AGI : 35
DEX : 10
LUK : 15

40pが未使用です
ポイントを割り振って下さい

スキル

咆哮 : 3p スキルスロット1
爪裂き : 5p 未設定

フィニッシュスキル

ドラゴンクロー : 40p 未設定

から

《ステータス

LV: 4 : 倉内沙里

竜人族

HP : 240 / 240

MP : 72 / 80

ATK : 70

DEF : 65

INT : 25

MGR : 35

AGI : 35

DEX : 10

LUK : 15

スキル

咆哮 : 3p スキルスロット1

爪裂き : 5p スキルスロット2

フィニッシュスキル

ドラゴンクロー : 40p 設定《

色々弄った結果、こうなった。

40pを割り振ってください、という言葉と、レベルアップしても

強くなった気がしなかったことから、1レベル上がることに10p
手に入り、これを割り振ることによって強くなるのだとわたしは予
想した。

そこでポイントを割り振ると念じると、ステータスウィンドウに重
なるようにして光の小窓が現れたのだ。

《ATK：?0
DEF：?0
INT：?0
MGR：?0
AGI：?0
DEX：?0
LUK：?0》

ステータスウィンドウにも表示されていたこの数値は、ポケ
ンで
言う所のこうげきやすさ。つまり強さを細かく表す為のものだ
ろう。

割り振るとはレベルアップによって得た40pを消費して、この数
値を増やすということなのだ。

しかし、やはりゲームに詳しくないわたしにはINTやらMGRや
らは難しい。

理解で出来るのはATK、
DEF、LUKのみである。

なので理解出来るATKとDEFにしか振らないことにした。

先程も言った通り、他のステータス値が理解出来なかったという事もあるが、わたしは攻撃力と防御力、単純な戦士の力があれば問題ないと思うのだ。

運は必要だと思ったら振っていくことにしよう。

《ATK：?20

DEF：?20

INT：?0

MGR：?0

AGI：?0

DEX：?0

LUK：?0》

「何か大きな間違いを犯しているような気もするけど、まあいいよね」

HPが増えたのが気になった。

どうやらATKとDEFにポイントを振ればその分増えるらしい。

では残りのステータス値にポイントを振ればMPが増えるのだろうか。

「という事は魔法関係・・・いや、スキル関係か。これは後々困ったことになりそうね」

とりあえずの目標はこの森を抜けて人里に行くこと。

問題は無事辿り着けるかどうかだが・・・出現するモンスターのレベルがわたしより高くても、種族の元々の強さが違うらしいので今の所手こずったことは無い。

竜人族はかなり強いようである。

《びろん》

「あ」

《Lv・5：チェリースライム》

「ぶるるんっ！」

三度蹴った。

モンスター名の下に引かれている光の棒、HPバーがゼロになる。

「ぶるううう!？」

チェリースライムは地面に崩れ落ち、ピンク色のシミとなった。

《びろびろん》

《倉内沙里のLevelは上昇した。倉内沙里はLv・5になった》

「・・・まあ、こんなのに負ければ恥だよね。「設定」でHPも分かるようになったし」

チラリと、自らの頭上を見上げる。

そこには先程の猪と同様、光の棒が浮いていた。わたしのHPバーである。

しかし、「設定」に「ゲームをやめる」が無かったのが残念だった。そうすれば直ぐに元通りに戻るかもしれないのに。

しかしそれは戦士の心を忘れ、元の臆病な性格に戻ることも意味し

ているので、良く考えれば微妙なのだが・・・心の深い部分で元の世界のあれこれを求めている自分もいるのだ。自分の事ながら複雑な乙女心である。

「設定」では「HPバーの視認」以外で使える設定可能項目といったら「ネーム表示」くらいしかなかった。

文字の大きさの調整や色の变化、レベルアップ時の効果音設定など全く役に立たない。

使えない繋がりでメニューウィンドウの「地図」には日本地図や世界地図しかなかった。恐らく一度見たことのある地図が表示されるのだろう。

家族旅行で行った沖縄の地図が紛れていたので間違いない。

分かったことは増えたが分からない事もまた増えた。まだまだ前途多難である。

「道しるべがあるだけままだましか」

わたしは人がいることを願い、森から唯一見える建造物、天高くそびえ立つ塔に向かって歩き出すのだった。

救援を受けた

5

スキル爪裂き、使用！

．．．パキツ、ゴキ、メキメキメキツ

このスキルにより、わたしの手のサイズが四倍程大きくなり、赤黒い鱗と鋭い爪が生える。
範囲は手首までなので不格好だが、敵ついドラゴンの手．．．前足である。

使うのは三度目だが、何度見てもグロテスクな変身だった。

「．．．．．やっぱり痛みは無いけど違和感が」

「プギイーーー!!」

《Lv.8：ウッドボア》

「う、おっと．．．!!」

力強い猪の突進。わたしは避けきれない。

止む無く巨大な牙を掴んで受け止め、激突を回避した。

Levelが7になった上、ポイントは攻撃力と防御力にしか振っ

ていないので、このくらいは軽いものだった。

しかしスピード、すばやさだけは上がった気がしない。

わたしが理解出来なかったステータス値の内、三つのいずれかが速さの値なのかもしれない、そう予想する。

「ちっ．．．くらえっ！」

スキル爪裂きによって強化された爪を振るう。

同じモンスターで検証した結果、通常の全力パンチよりも攻撃力約200%増という事がわかった。

その上ポイント振りによって成長したAKT：85+種族としての元々の攻撃力の高さが加算される。

結果、レベルが一つ上でも爪裂き、そしてトドメの蹴りでHPバーは0になる。

ちなみに猪の種族としての力は強い方だ。

スライム系はやけにHPだけは高いが、Lv.7のグリーンコンドルなどパンチ一発で沈んだ。しかし攻撃は非常に当たりずらいのだが。

あと気になる事といえばわたしの異常な回復力だ。ちょっとやそつとの傷は直ぐに治ってしまう。

これはDEFの値と竜人族の種族としての力が関係してくるのだから。

純粋な防御力と合わせ、まるで不死身にでもなった気分である。

「．．．ん？ 今何か引つかかったような．．．．．
．．．．．まあ、いいか」

どうやってもわからないこと、細かい事、どうでもいい些事を気にし過ぎてはいけない。戦士には思い切りが大切なのだ。それよりもMPである。

頭上を見上げててもHPバーがあるだけでMPはわからない。小まめにステータスで確認する必要がある。

「ステータスウィンドウオープン」

《ステータス

LV : : 7 倉内沙里

竜人族

HP : 268 / 270
MP : 59 / 80

ATK : 85
DEF : 80
INT : 25
MGR : 35
AGI : 35
DEX : 10
LUK : 15

スキル

咆哮：3 p スキルスロット1

爪裂き：5 p スキルスロット2

フィニッシュスキル

ドラゴンクロー：40 p 設定

「ん？ HPが減ってる。猪を受け止めたときかな。突然だったから手首捻ったんだよね」

まあ、直ぐに回復するのだろうけど……ほら。

しかしこの体になってからは痛みに鈍感になっていけない。気を向けていればちゃんと感じるのだが……。

その時、空にはあああんと、何かが弾けた。方向は塔の見える方より少し左の空である。

「花火みたいだったけど……」

《ぼん》

「？」

聞いたことのない電子音だ。次いで光りの文字が現れる。

モンスターはいない。

やはり戦闘の合図ではなさそうだ。

とすると原因は……。

《同じフィールドでフレインの救援を確認しました。戦闘に参加し

ますか?》

予想は的中。さしずめあれは信号弾か。

「フレイン? 名前だよな。もしかするとわたしと同じ境遇かもしれない。ここはどうするべきか。」。」

詳細と念じる。 . . . 何も起こらない。

情報と念じる。 . . . 何も起こらない。

フレインと念じる。 . . . 何も起こらない。

口に出して言ってみる。 . . . 何も起こらない。

「これ以上は無駄ね」

諦める。

そして目を閉じ、自分がどうすべきかを考えた。

困ったときは目を閉じて考えてみなさいと父に言われたのだ。

わたしはゲーム初心者。

ゲームの世界でこれは戦いの初心者を意味する。

従姉妹の持っていたポケソンのレベルは全て100だった。

しかも従姉妹は「わたしは弱い方」と言っていた。

これらをまとめれば、わたしはまだまだ弱いという結論に達する。救援に来たこちらが足を引っ張ったのでは意味が無いどころか本末転倒。

「わたしは臆してなどいない。しかし勇氣と蛮勇はまた別。しかし助けを求める者を放って置くのは誇り高き戦士の振る舞いではない――救援を受託する！ 戦闘に参戦する！ OK！ Yes！」

《救援を受託しました。誘導に従ってください》

光りの文字が消え、代わりに矢印が現れる。これが誘導だろう。

今までの手応えからして、スピードの分を差し引いても今のわたしなら恐らくレベル15までなら戦える。

この森に高いレベルのモンスターは居ないと思うが・・・何せ、わたしもまだ半日程しかここにいない。

何はともあれ、今は行動が先だ。

わたしは矢印に従い、出来るだけ早く着くようにと走り出した。

人と出会った

6

わたしが誘導に従い、信号弾が上げられた戦場に来たとき、そこは既に死屍累々の有様だった。

もしもわたしが以前そのままであれば、一目見た瞬間に胃の中の物を吐き出してしまっていただろう。

《Lv.19：ブラックウッドマン》

黒塗りの樹皮にその巨体を包んだ樹の巨人。腕が四本生えており、その一本一本が杭のような武器を持っている。

巨人の足元には死体が二体。

片方は頭を割られ、片方は胴体から真っ二つ。どちらも惨い死に様だった。

対して巨人と戦っているのは男性二人と女性一人。剣と盾を持つ男性二人が前衛、杖を持つ女性は後衛のようだ。

「――怒りの猛火よ！ 怨嗟の業火よ！
七つの剣となり敵を切り刻めえ！！」

女性が唱えているのは魔法の呪文だろうか。女性の周りに人一人分はある炎の剣が七つ出現した。

どうやら魔法はスキルと違い呪文を必要とするらしい。

怒りに歪んだ顔に涙を流し、叫びと共に杖を振り下ろす。すると剣たちは命を受けたかのように巨人に殺到し、腕を一本吹き飛ばした。

良く見ると巨人の背中には巨大な枝を折られたような跡が今のを合わせて三つある。巨人の腕は元々六つあったらしい。

魔法使いの女性は両肩を上下に忙しく動かし、荒い呼吸を繰り返している。

「おい、あんた！今の規模の魔法あと何回撃てる！？それと補助系の魔法は！？」

前衛の一人、大剣を持つ巨体の男が叫ぶようにして訪ねる。

この巨体の男ともう一人の剣と盾を持つ男は先程からよく目配せをしている。今さっきの付き合いではないだろう。

どうやら救援の信号弾を上げたフレインは魔法使いの女性の仲間であの死体のどちらか。

救援を受けて来たのがあの二人の男性ということらしい。

ブラックウッドマンのHPバーは・・・残り六割と少し。対して魔法使いの女性のHPバーは八割。名前はエネミー、レベルは22。

前衛の二人のHPバーは見えない。救援をしていないからだと予想。名前は大剣の大男がジフ、優男風の剣盾がジル。親子なのかもしれない。レベルは25と19。ジルの方は相当苦しそうだ。

それにしても全員レベルが高い。
これはどうするべきか……………。

「何発でもお、撃てるっ!! ユウとフレイルのっ、仇をー!!」
「馬鹿野郎! てめえの意気込みなんざ聞いてねえんだよ! それじゃあ打てる仇も打てなくなっちまうぞ! 冷静になって自分のMPと相談しろ!!」

「に、兄さん不謹慎ー!」

「大馬鹿野郎! 喋る暇があつたら敵を見る!!」

「うおっ!」

「ちい、手前かけさせんじゃねえ!」

「わ、悪い!」

「…さっきの威力なら一発、落とせば十発はいけます! 補助はagility中上昇、二人分使っても問題ありません!」

「よし使え!」

アギリテイ……………AGIか!

この三人はわたしのわたしの知りたい情報を色々知っているらしい。

「猛き者に風の加護を! 猛き者に風の加護を!」

女性が二度唱える。

すると、途端に動きが機敏になる男性二人。

AGIの値はどうやらすばやさのようだ。

戦闘は激しさを増している。

前の二人が攻撃を凌ぎ、後ろの女性は魔法で補助。

しかし女性はMPが残り少ないようなので一度補助したきりだ。必

死に目を瞑って何かぶつぶつと唱えているが・・・何をやっているかはわからない。

動きの俊敏になった前衛二人をもつてして、樹の巨人の猛威は衰えることはしらなかった。

足を踏み出す度に地面は陥没し、辺りの木々はなぎ倒されている。

凄まじい剛力だった・・・ん？でもあのくらいならわたしにも出れないか？

確かに規模は違えどそれは大きさの問題。少なくともATKとDEFは負けてはいない・・・気がする。

「このままではあの三人は負けるだろう。しかし足を引っ張る訳事だけは・・・」

《びこんびこんびこん》

いつもより大きな音量で電子音が三連続。

これは・・・あの樹がボスのような扱いだからだろうか？それともレベルに差があり危険だから？

いや、今はそれより・・・。

「気がつかれた！」

こちらに向けて振られた杭を避けるため、わたしは倒された木の影から戦場へと転がり込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9386z/>

ドラゴンとかたおしたい。

2011年12月31日02時48分発行